22th SEA SIGEDU教育ワークショップレポート

実行委員長＆参加者代表 オムロン ソフトウェア（株）牧野 憲一

２００８年１１月に恒例の SEA SIGEDU教育ワークショップ（以降、WSと表現）を中国・上海で開催しました。SEAMAILを愛読の各位にWSの雰囲気の一部でもお伝えできればと思い、レポートを作成します。これを読んでSIGEDUの活動に興味を持っていただき、活動に参画していただければ幸いです。

1. 参加者

岸田 孝一	SRA一KTL	SEA board
熊谷 章	TAO BEARS LLC	SEA board
杉田 義明	福善(上海)信息技術有限公司	SEA board, SIGEDU, SEA 上海
米島 博司	NEC ネッツエスアイ株式会社	SIGEDU
臼杵 誠	富士通株式会社	SIGEDU
松野 誠	得基愛芙（上海）信息技術有限公司	SEA 上海
牧野 憲一	オムロン ソフトウェア株式会社	SIGEDU, SEA 上海

基調講演参加

鈴木 修平	上海裕日軟件有限公司	SEA 上海

11/7 ナイトセッション参加

小川 清	名古屋市工業研究所	SEA SPIN

11/8AM セッション参加

東 誠	上海宮東軟件有限公司	SEA 上海

事務局 魯 玉芳 福善(上海)信息技術有限公司

2. 経過

WS開催までの経過は下記の通りです。事前アンケートを実施して、要望を吸い上げつつ、WS開催をアピールしています。

2 月 21 日	[sigedu:05681] SIGEDU 秋の WS 企画（杉田）
2 月 25 日	SEA 幹事会にて“上海実施で検討を”（事務局長）
3 月 12 日	SIGEDU 月例会で“上海開催”を誘致（杉田）
6 月 5 日	[sigedu:06167] 22th Workshop 事前アンケート依頼（牧野）
6 月 20 日	会場候補・科学会堂視察（杉田，牧野）
8 月 1 日	基調講演決定 Prof.JuDehua（ASTI）（杉田）
8 月 29 日	会場・文芸賓館→中福大酒店視察（杉田，牧野）
9 月 2 日	[sigedu:06479] 22th SIGEDU-Workshop 開催要領（牧野）
9 月 18 日	SEAMAIL に折込パンフ同封
9 月 19 日	[sigedu:06533] 22th SIGEDU-Workshop 開催要領・参加者募集

3. 事前アンケート集計結果

設問１：Workshop＠上海に参加してみたいですか？

(1)万難を排して参加	篠崎、杉田、牧野
(2)日程調整と軍資金を調達し、参加	熊谷、中野
(3)参加が前提だが、まだ少し流動的	米島、岸田、臼杵
(4)参加したいが、まだわからない	君島
(5)参加できるかわからない	―
(6)参加は難しい	佐原、和田、平野、成澤

設問２：テーマについて

・中国ソフトウェア技術者育成の現状課題（米島）
・IT と ID（君島）
・中国におけるIT教育とID（ISD）の普及状況。
オフシェア開発で成功するためにはどうすればよいか（篠崎）
・オフショア開発の仕事をしている上海の若いプログラマたちと話をしたいですね．オフィスアワーに人を集めるのは難しいでしょうから，食事つきの Evening Forum を企画して何人か招待したらどうでしょうか．経営者やマネージャのいない席であちらの若い人たちの本音を聞きたい．去年ある会社の若い人たち相手に講演をしたことがありましたが，あのときは一方交通だったので，かれらの意見はほとんど聞けなかった．（岸田）
・アジアにおけるソフトウェア産業、コンピュータ産業の問題と今後の見通し（熊谷）
・中国ソフトウェア技術者育成の現状課題（臼杵）
・中国学生における日本のIT企業のイメージ（臼杵）
・プロセス改善活動の実態（CMMIは形骸化していないか）（臼杵）

設問３：参加に関して　≪回答掲載省略≫

(1)参加者
ご本人のみ・家族帯同
(2)滞在期間
前後、滞在される予定があればご記入ください。
(3)Option およびリクエスト
WS 期間中、期間外の Option、リクエストがあればご記入ください。

4.　プログラムと話題提供括

弧内が話題提供者

■11 月 6 日（木）

17:30 ― 18:20　受付＠中福大酒点ロビー

集合 18:25 ロビー

18:30 ― 20:30　ウェルカムレセプション＠鮮 Qiang 房（ホテルの向い側、永安百貨の4F）

■11 月 7 日（金）

-------オープンセッション A----午前中----------＠中福大酒点-----

9:00 ― 9:15　オープニング （牧野）

9:15 ― 10:30　基調講演（Prof.JuDehua（ASTI））

"Talents Engineering In China". --中国でのソフトウェア高度化産業政策と教育戦略―

休憩

10:45 ― 12:00　討議（1）プロセス改善活動と人材育成（臼杵）

～ CMMIを形骸化させない人材育成とは ～

昼食 ＠利和苑（香港料理、ホテル2F、レストラン）

→移動 （TAXI-2 台に分乗）（ホテル→ハイロン社）

-------企業訪問と討論----------＠ハイロン社-----

http://www.hyron.com/JP/jpindex.html

13:30 ― 15:15　討議（2）オフショア企業ハイロン社訪問（牧野）

現場技術者と交流

休憩

15:30 ― 16:45　討議（3）教育分科会の紹介とインストラクショナルデザインの勧め（米島）

→移動 （地下鉄：徐家匯 →人民公園）（ハイロン社→ホテル）

-------イーブニングセッション---------＠老正興,3F-------

17:30 ― 2100

招待講演（藤野真子准教授、関西学院大学）（杉田）

「中国伝統演劇を通じて眺めた中国人気質」

講演の後、討論と食事（上海蟹料理）

食事をしながらオフレコセッション：XX 裏事情（松野）

■11 月 8 日（土）

-------オープンセッション B-------午前中-------＠中福大酒点-----

9:00 ― 9:40　討議（4）資格取得と業務遂行上技術力の相関（米島）

9:40 ― 10:40　討議（5）技術革新と教育：エンジニアが生まれる風土（熊谷）

～ 中国、日本、インド、アジア ～

休憩

10:50 ― 11:50　討議（6）ソフトウェア技術者のモチベーション（岸田）

11:50 ― 12:00　クロージング（米島，牧野）

昼食（飲茶） ＠杏花楼

解散

5.　セッション要約

（1）基調講演：″Talents Engineering In China″.
　　−中国でのソフトウェア高度化産業政策と教育戦略−−
　　（講師：居徳華（Prof.JuDehua（ASTI））／要約：杉田）

　ワークショップを企画した当初から教育と事業、それに国家の経済政策に密接に絡んで活躍されているJu先生に,基調講演をお願いできたらと願っていたがそれが現実になった。ヨーロッパ、および日本へ訪問されて、ちょうど帰国されたタイミングだったためか、各地の事情を織り交ぜてのお話であった。
　講演の狙いは中国での国家戦略の中で、ソフトウェア教育の重要性とその事業としての戦略をお聞きするということにあり、先生の豊富な経験を元に意見交換をすることもあった。しかしながら1時間あまりの制限時間枠の中で、用意されたスライドが150枚余りであり、とても話が収まり切れなく、質問などでの意見交換も十分確保できなかった。
　ここではそのエッセンスを紹介することにするが、配布されたスライドには詳細な記述があり、その理由や内容を知る上で参考になることが多くあり、まとめに際し最後に数枚のスライドを添付した。

◆全体要約
　現在中国ではITタレントが不足しており、特に中堅クラスの技術者、シニア専門家が少ないために発展のボトルネックになっている。政府の経済政策の「第11次5カ年計画」（期間：2006－2010年）では、ITを国の重要産業と位置づけ、2010年までにGDPの10%を占める目標に設定している。計画全体での成長率は17.6%であるが、そのうちソフトウェア産業は30%の成長を目指す。この計画を具体化するためか各地でソフトウェア産業振興政策が盛んに実施されている。
　その中の一つ成都では、Global Famous Software City （国際軟件名城）と名付けてプロジェクトを推進しており、2010年までに600−800億ドルの売り上げと,20万人のソフトウェアの専門家の養成、3−5億ドルの輸出、成長率目標を45%に設定している。これらを推進するために、オフィスの無償貸し出し、要員の人件費の補てん、減税政策などを実施している。これは成都だけではなく上海の近くの無錫でも同じような政策（添付スライド参照）を実施している。

　このような中で教育のニーズはかなり高まっており企業が成長するために必須となる人材への投資が盛んに行われている。ガードナーなどの調査によると現在100万人の人材不足が指摘されており、今後6年間で300万人の教育を実施する必要がある。今まで2001年から37のソフトウェア工学スクールが各地で設立された。しかしながらこれらの教育分野にはインドが進出しており、インド政府の国家を挙げての後押しもあり、中国に狙いを定めている。インドは米国向けのアウトソーシングで成功したこともあり、中国各地の政府ではそれの成功モデルを導入したいと考えているようだ。また世界トップ15のIT教育会社が既に国内に進出してきている。

　ここに我々の事業チャンスがあるのではないか、ローカルな分野でのIT教育産業の可能性がある。しかし従来のようなトレーニングセンターを開設するのではなく、インドが成功したような実務にもとずいた訓練を中国独自のものにして,国家レベルでのタレント開発を目指したい。
　では具体的にはどのような戦略を設定するか、まずは世界的に高い標準レベルを達成するために、最高クラスの会社、研究所と提携し、基盤を構築しながら応援態勢を構築する。国際的に見ても高度レベルから開始して、ブランドとしての名声を確立する。そして次は拡大に移り、各地のトレーニングセンターへの展開とそれへの先生を養成しながら地域を拡大する。
　ではタレントエンジニアリングをどのように設定するか、それは3つの分野を7つ選んでそれぞれの関係のフレームワークを構築し、それへの教育を実施する（添付スライド参照：Talents Engineering

Framework）。こうした教育の収入予測をしてみると,1年間に5.38億ドルになることも予想される。その他の調査でもIT教育市場は年間30%の成長を達成して
いることが報告されている。
　以上のことを受けてどのような戦略でこの市場へ向かうかを、他との違いを明確に打ち出しながら我々の方法を述べたい。Ju先生およびその会社組織ASTIでは先生の30年間におよぶ教育分野での経験、20年の産業界、10年におよぶIT教育事業の経験から豊富な実績を積み重ねている。その中では世界の組織との連携や岸田さんをはじめ
世界で活躍するエキスパートの人たちとの交友関係もある。さらに今までIT専門家の完璧なフレームワークを設定して、それぞれBOK(Body of Knowledge:　知識の集合体、添付スライド参照）としてまとめてきている。ソフトウェア工学、情報技術、新商品開発と革新の3つの分野で128個のBOKをこの3年間で完成した。このうち32は我々独自に作成したものである。
　利用分野において新しいニーズに対応するために、PMBOK（プロジェクト管理BOK)では、従来のPMBOKに新しくアジャイル管理やグローバルプロジェクト管理、それに21種のソフトウェアスキルを追加した。また最近のアウトソーシングニーズの増大から独自のOPBOK（アウトソーシングプロフェッショナルBOK)を開発し、ビジネス管理、要員管理、技術・ノウハウ管理、グローバルプロジェクト管理、運用サービス管理の観点でまとめた。その他SPIBOK(プロセス改善BOK)、NPDBOK(新商品開発BOK)、CTOBOK(最高技術責任者BOK)などを開発してきている。
　一方IEEEにはCSDP(Certified Software Development Professional：ソフトウェア技術者の総合認定試験）のような資格認定制度があり、日本にはUMTP(UMLモデリング推進協議会)や、Ju先生が役員になっているiNTACS(ISO/IEC 15504アセッサー資格)がある。これらの認定制度とBOKとの組合せで新しい事業のアイデアを具体化してみた。

　そこで考えたのがKnowledge　サービスであり、これには従来のBOKを集め、再編成したり、開発したり、公開するだけではなく、知識の技術移転を推進するものである。そしてこれを実現するためには公共のサービスプラットフォームが必要であり、それらは知識を共有化する目的でもある。
　我々はその実験をするために国のスポンサーの元でアウトソーシング公共サービスプラットフォームを開発した(NSISOPのURL参照）。　現在10政府でさらにローカルな情報を加えて運用されており、SE/IT技術移転センターが開設され教育に関するワンストップサービスが提供されている。またローコストでのe-learningやコミュニケーション実務スキル(CoP)を勉強するための新世代のJob-learningも運用されている。特に上海では36個のJob-learning-systemが使われている。我々はこれに資格認定制度を追加し、IIOM(International Institute for Outsourcing Management)と提携しOMBOK(Outsourcing Manegement BOK)として運用するつもりである。
　そのほかアウトソーシング分野と同じようにSE Knowledge　公共サービスプラットフォームやIT Knowledge　サービスプラットフォーム、Inovation Knowledge　公共サービスプラットフォームも計画している。
　以上簡単に背景と我々の取り組みをお話したが、主題はBOKにもとずいたKnowledge公共サービスであり、従来の伝統的な教育とは異なり、また公共の図書館サービスとは違い、最小の投資でありながら、win-winの関係を作りつつ新しくKnowledgeサービス産業を立ち上げるものである。

◆質疑応答：
〇質問：先生が主査しているBOKでのアクセス状況はどうなっているか、英語でのアクセスになるのか、また拡張の計画は？（熊谷）
〇回答：英語でのWebに関しては20ヶ国から1年間で3,000件の利用があり、今後も増えている。この前IPAの講演で日本に訪問した際に、QA（品質）分野でのWeb Knowledge Services　への関心が非常に高いことに気がつき、早速そのBOKを用意した。

〇質問：Webで公表することに関して、著作権の問題の発生が懸念されるが（熊谷）
〇回答：公開された技術情報や提携先から了承を得ているので、問題を感じていない。

◆最後に

以上豊富なスライドをもとにしての概要を述べたが、実際は参加者からの活発な質問に答えてあちこち脱線しての例を挙げながら、冗談を交えての講演であった。最後は急いだために後半のスライドを大幅にスキップし、タイトルだけのお話になってしまった。この講演録をまとめるために再度スライドを読み直して見ると、講演でのウエイトではBOKに基づいてのKnowledge Serviceにあったようだ。しかしながら時間の制約からか、そのサービスの内容や今後への展開、国としての政策への反映などスキップせざるを得なかった。

Ju先生にはIWSFTなどSEAのイベントで今後お目にかかることも多いので次回お会いした際にはこのあたりの展開をお聞きしたいものだ。

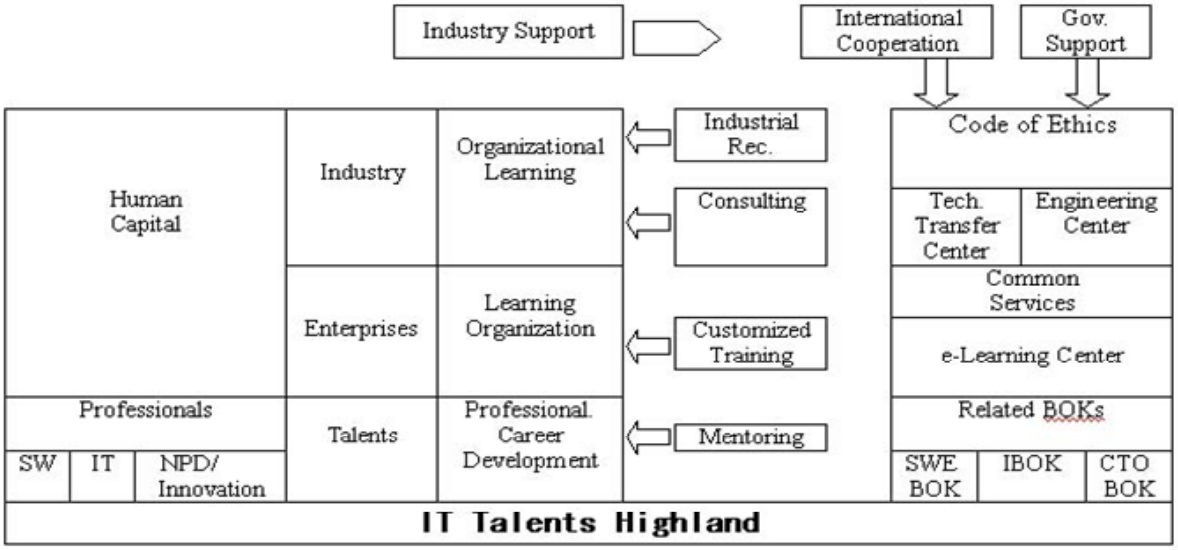
◆参考URL:

〇iNTACS
http://www.intacs.info/
〇IPA開催の2008Forum-Ju先生の講演紹介
http://www.ipa.go.jp/event/ipaforum2008/program/sec.html#sec1
〇NSISOP(Ntional Software and Information Services Outsourcing Platform)
http://www.china-sourcing.org.cn
〇http://www.asti-global.com
〇http://www.ASTI.com.cn
〇http://www.ITURLs.com
〇http://www.cnoutsourcing.com
〇http://www.globalIToutsourcing.org.cn
〇http://www.SEChina.net
〇http://www.cspin.org.cn/about.asp
〇http://www.csbsg.org/

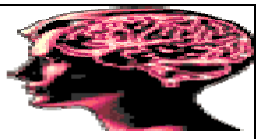
Wuxi's(無錫) '123 Project'

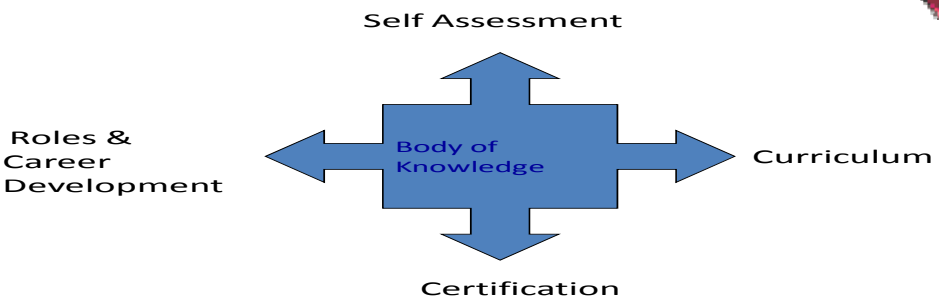
- By the end of 2010, 100 international service outsourcing and software export enterprises will cluster in Wuxi, each of which has over 2,000 employees and an annual export volume of over US$ 30 million
- Supporting Policies:
- Rent Reduction and Exemption: the software export enterprise will be offered a leasehold office, the area of which can be figured as 10 m2 per employee. The corresponding rent will be exempted for the first year and half for the second and third years
- Financial Subsidy: the software export enterprise will be granted a lump-sum subsidy of RMB 5-10 million yuan for the introduction and training of talents if it has over 500 employees and an annual export volume of more than US$ 3 million
- Export Reward: the software export enterprise will be rewarded RMB 10,000 yuan for every increase of US$ 50,000 in export over the previous year
- Reward for Talents: will get a 30% rebate of their individual income tax for five consecutive years

A Framework For Talents Engineering

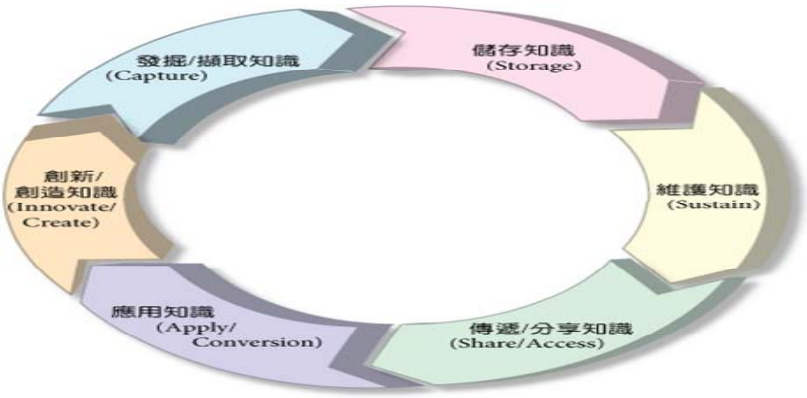


Role of BOK





All-Dimensions Value-Added Services Over the Whole KM Chain



21 Soft Skills PMBOK

- Leadership, 领导力
- Critical Thinking, 批判性思考
- Work Ethic, 工作伦理, 职业精神
- Self-Motivation, 自我激励
- Honesty, 诚实
- Teamwork, 团队精神
- Risk-Taking, 风险承担
- Adaptability, 适应性, 灵活性
- Interpersonal, 人际关系
- Working Under Pressure, 工作压力承受

  Stress Management, 压力管理
- Creativity, 创造性
- Influencing, 影响力
- Research, 研究能力
- Problem-Solving, 问题解决能力
- Organizational, 组织能力
- Multicultural, 多文化处理
- Learning, 学习能力
- Time-Management, 时间管理
- Oral Communication, 口头沟通
- Written Communication, 文字沟通
- Detail Orientation, 细心周到

Summary

- Knowledge Service Is key component and essential infrastructure of knowledge economy era.　Knowledge is a crucial resource in promoting modern industries and economy
- We have proposed a complete framework for developing modern knowledge service industry here
- Moreover, Some concrete implementation contents have been designed specially for several key domains urgently required: Software Industry, Outsourcing, Informatization, New product development and indigenous innovation
- It Provides an ideal learning support environment for HRD urgently needed
- The same knowledge service model and IT platform can be easily copied and reused to other domains as well
- This will make future society like a stretch of fertile land with rich knowledge nourichment on which people can easily absorb various knowledge they required to germinate and grow into useful timber, giving full play to value of knowledge applications

（2）討議（1）プロセス改善活動と人材育成（話題提供：臼杵／要約：米島）

Ju先生の壮大な中国ソフトウェア技術者育成の大講演がいつ終わるかと時間が気になりましたが、なんとか休憩をはさみトップバッターの臼杵さんのセッションが始まりました。

臼杵さんの発表が始まるやいなや、岸田さんから「大体、プロセス改善などと、改善なんていうのがおかしいのではないか。ソフトウェアエンジニアリングの世界ではそれぞれの局面、時機に最適化をしてきたはずだから、改善という現状を否定するような表現はふさわしくない、改革としてイノベーションというのは理解できるが」と、クールかつ強烈なパンチが出ました。臼杵さんは「そうなんです。イノベーションという方が良いと私も思っています」と、ゆらりと矛先を交わし、さすが品質管理のプロと思える会話術でした。また、ソフトウェア開発における問題構造として、氷山の一角に「障害」を浮かばせ、海面下に、順に、「人」、「方法論（技術）」・ツール、そして最深部に「プロセス」をおいた図が提示され、参加者の興味を引きました。「『人』は一番下じゃないの？」とか、「いや『方法論』が一番下だろう！」などと、意見が飛びあい、開始早々、いかにもsigeduらしい自由闊達な、というか天衣無縫というか、はたまた破天荒とも見える議論の場に突入し、常連メンバーとして、安心した瞬間でもありました。

臼杵さんの発表は品質管理の立場としてではなく、プロセスマネジメント推進室としての立場からの主張でしたが、スタッフとして現場に働きかける際の苦労がにじみ出ていて、苦労を偲ばせる発表でした。今後の健闘を祈ります。

（3）討議（2）オフショア企業ハイロン社訪問

--現場技術者と交流--（話題提供：上海ハイロン社の皆様／要約：牧野）

午前中は中福ホテルの会議室が会場でしたが、昼食後、タクシー2台に分乗して、徐家匯にある上海ハイロン社を訪問しました。目的はタイトルにあるように、オフショア企業を訪問して、その教育制度についてお聞きし、第一線の技術者との交流を通じて、ソフトウェア開発や教育の実態について把握することでした。

はじめに、企業概要として売上推移、要員数推移、開発ソフトの内訳等をご説明いただきました。説明

資料の中では企業名等は伏せておられ、セキュリティに対する意識の高さが伺えました。それにも関わらず「教えて欲しい」と食い下がっていたメンバが居ましたが。

・立地条件
　ハイロン社は市内の中心部の一つにあります。交通の利便性も良く、とても恵まれた環境にあります。上海には郊外に幾つかのソフトウェアパークが存在しますが、ソフトウェア技術者がどちらを好むかの結論は明白な気がします。
・離職率
　中国同業他社の半分以下であるという点は特筆に値します。発注者にとってとても気になる要因ですね。継続的発注の条件になりますが、上述の立地条件も大きく影響しています。後半の技術者との交流においても、とても良い雰囲気の職場である事がうかがえます。
・日本語力
　オフショア企業にとっては大切な要因です。新入社員への教育は公的資格試験の実施日を十分意識した教育計画がなされており、平均レベルの高さがうかがえました。

　その後、人材育成ご担当からの説明がありました。説明をしてくださった方は元々技術者でした。人材育成部門への“一本釣り“だったようですが、彼女のモチベーションは高いと感じました。当日の資料を皆さんにお見せできないのが残念ですが、優劣に対する考え方は生々しいグラフとなって表現されていたのが印象的でした。
　最後に技術者との交流です。グループマネージャクラス、リーダークラス、SE、PGで6名に加え、先ほどの教育担当の方にもご出席いただきました。自己紹介、担当業務のほか、幾つかの質問をさせていただきました。緊張からか、多少日本語の会話に苦労された方もおられましたが、最後に「もっと××をしたい」の問い掛けには、皆さんご回答をいただけ、是非夢に向って努力していただき、実現して欲しいと感じました。「家と車」と答えた方がおられたのが印象的でした。
　終了は予定していた時刻でしたが、夕方のラッシュが始まっていることから、全員地下鉄でハイロン社を後にしたのでした。

（4）討議（3）教育分科会の紹介とインストラクショナルデザインの勧め（話題提供：米島／要約：牧野）
　最初に私達の自己紹介をし、SEAとは、SIGEDUとは何をする人達なのかを紹介いたしました。そして、ハイロン社へのお礼の意味も込めて、技術者との交流のコーナーで米島さんから説明がありました。
教育コースの設計はソフトウェア開発における工程のイメージに似ており、ハイロン社技術者にも理解できたようです。ハイロン社において、業務知識に関する教材化は進められており、技術者と人材育成担当との協働で作成しているとのことでした。思った以上に教育コース設計技法が活用される日があるかも知れません。今後もSIGEDUメンバによる支援が必要かもしれません。出番ですよう〇〇さん。

(5)招待講演：「中国伝統演劇を通じて眺めた中国人気質」
関西学院大学商学部・言語コミュニケーション文化研究科・准教授
（講師：藤野真子（Fujino Naoko）／要約：杉田）
　ワークショップ討論への刺激を込めるために、料理にピリット香辛料を入れるように、夜の招待講演をどうしようかと考えていたところ、偶然にも藤野先生にお会いすることができました。我々のスタッフの魯さんは紹興の出身ですが、彼女は小さいときから越劇の歌を歌っていたとかで、その縁で上海で何回か越劇を見ましたが、たまたま公演で席が隣り合って先生と知り合いました。ちょうどサバティカル休暇で上海に4月から滞在されており、伝統演劇を100回以上を見て、研究されているとのことで、是非ワークショップでお話をしていただけたらとお願いしたら、快く引き受けていただきました。

上海は北京などと比べると歴史がなく、近世になって列強の進出地域や商業として発展してきました.文化的な伝統がない地域で伝統芸能がどのように進化してきたのかを3つの伝統劇を取り上げてデモも交えながら解説いただきました。

そのうちのひとつ京劇は清時代末に北京から南下し、その後独自の発展をとり、上海派「海派」と呼ばれたリアルな演出、ダンスやはでな衣装、印象深いシーンへの追求などお金をかけて成功しました。越劇は現在の紹興近辺の民謡をベースに20世紀初頭に発展し、最初は何と男子だけの劇団だったのが、上海で女優のみの構成で人気を博し、現在に至っています。最近男優も入り、若い男女の恋愛劇が中心になっており、観客は宝塚歌劇のように、ひいきの女優を応援して、彼女の歌が終わると客席のあちこちにサポータ達の拍手が聞こえます。最後の滬劇（こげき）は現在の上海浦東地方の民謡である「東郷調」が源流とのことで、1910年代に流行した[文明戯」の衰退後、その人材が流入し,主に一般人を対象にした大衆演劇でした。上海近郊の「崑山」で明代に成立した「崑劇」も、京劇に影響を受けながら発展してきており、国の伝統文化政策の庇護を受けているが、これは主に知識人を対象にしたものです。

上海は歴史が新しいので古い物を守る必要がなく、新らし物好きが多く、人気を得ることならば冒険することが気軽にでき、改革を柔軟にj受容する風土です。SARSや四川大地震など最近の世相にあったテーマを気軽に上演するし、
政治面でもプロパガンダにも活用されます。伝統演劇の課題としては、観客層に若い人をどのように引き入れるかなどのようです。
上海の歴史の古い菜館で季節のカニ料理の前に、文字通りテーブルスピーチで、いろいろ質問にも答えて熱演していただきました。その後の食事は先生の研究の方法やこれからの話など聞きながら、大変おいしくて有意義な機会となりました。私は越劇を見ているとまるで浪花節を聴いているようでゆったりと気持ちが落ち着いて来るのですが、その遠因が何となくわかるような気がしました

（6）討議（4）資格取得と業務遂行上技術力の相関（話題提供：米島／要約：岸田）
スキル訓練とその評価の話でしたが，わたし個人としては，あまりこの問題には関心がありません.
いまの日本のソフトウェア産業における最大の課題は，階層的下請け・派遣構造をどうやって打開するかであって、それを放置しておいたままスキル教育や評価・認定を進めても，国全体としての技術力強化にはあまり役に立たないブルーカラー・ワーカーを大量に作り出すだけに終わるのではと危惧します.
もうひとつ気になった点は，ここ2～3年ヨーロッパの会議に出て気づかされたことなのですが，あちらでは，多国籍のグローバル分散開発の時代を見据えで， EU 全体で通用する各分野のエキスパートの養成と資格認定を E-Learning を活用して大々的に進めつつあります．日本も、単なるコスト削減のためのオフショア開発委託ではなく，アジア全体を展望したグローバル開発の時代に備えて，国際的なスキル標準や資格認定を考えたほうがよいのではないでしょうか.
そしてまた，世界のソフトウェア・コミュニティに対して，新しい技術やアイデアの情報発信を行うための教育・人材育成をどうしたらよいかを，日本が中心になって考えるべきではないかと思います.
今回の Ju 先生の Talent Engineering の話をお聴きしても，中国はまだ，国内のことにしか目が向いていないようです．ハイロン社もまだオフショアの仕事をどうこなすかだけで精一杯みたいですね.
グローバル分散開発の分野で欧米に立ち向かうためには，やはり日本のリーダーシップが求められるのではと感じるのですが，ひるがえって IPA/SEC あたりの現状を見ると，とても無理かな？

（7）討議（5）技術革新と教育：エンジニアが生まれる風土（話題提供：熊谷／要約：臼杵）
２日目の朝 一番のセッションとして、私が一番聞きたかった熊谷さんの「技術革新 と教育：エンジニアが生まれる風土」についてまとめました。「上海での 企業方法」というパワーポイントを基に、まずは中

国との交流から始まった。そこで、今年１０月の小倉にて作成された以下の文章についての解説が始まった。熊谷さんの文章をそのまま以下に引用します。

　風土とは、はみ出したものを許容しそれを醸造する場の力である。教育とは、人にいまとは全く違ったものを萌芽させ育成させる土壌を作ってあげることである。彼らが生き生きと覚醒し、自立し、何かを目的として生きてゆくことをサポートすることである。その実践には、考え方、技術、テクニック、情緒など必要とされるが、実は何でもよい。ソフトウェアとは、正にこの何でもよいというかつて歴史上にない機会を作ったと考えられる。1990 年に上海でソフトウェア会社 を設立したときに、錦江飯店で作成した詩を思い出す。

錦江飯店九〇六号室 1993 年 1 月 17 日作
こ こは上海茂名南路五十六号
錦 江飯店北楼九〇六号室
向 かいは蘭心大戯院
は す向かいのビルには
灼 熱の夏の日に
跳 び下りたタクシードライバが破ったガラス窓に
べ ニヤ板が貼り付けられたままだ

CNN ニュースに飽き
NHKBS 放送に飽き
持 参した日本の本も中文の練習読本も詰まらなくなり
曇っ た覗き窓からぼんやりと夜更けの街を眺めやる
途 は凍てつき氷が張ったままである
人 々は両手をポケットにうつむいて歩く
午 前零時半
窓 ガラスの曇りを手で拭くと
三 十年前の日本が見える

心 が穏やかになりスーッと情景に吸い込まれてゆく
遠 い昔日本の北国で育った頃の馴染みがある感覚が身体に蘇る
冴 えわたった冬の朝の感覚と匂いだ
雪 と雀と杉が氷雨と人と鈴懸になる
そ して俺はといえば日本人からズレた
無 国籍人となろうとしている

い まの日本はたまらない
何 が堪らないかと聞かれることがたまらない
堪 らないことの証明だ
堪 らないことの関係で一つの社会ができあがっている
日 本のオブジェクトモデルがたまらない
エ ンティティ（実体）がたまらない
リ レーション（関係）がたまらない
ア トリビュート（属性）がたまらない
そ の自己完結性がたまらない

だ から、日本を捨て
日 本から追い出されて
無 国籍人になろう
　小倉、旦過、河の辺り、独り、Bloom という店、流れる Jazz、見知らぬ人々、恋人同士の語らい、イタリア料理、イタリアンワイン。地タコのカルパッチョ、手作りドライトマトとにんにくのスパゲティ、鴨のソテー、ローズマリーのフォカッチャ。それらが総て風土であり、食べ物であり、俺を愉しませ、俺を励起してくれる。
　何かしっとりとしかつ馴染みがあるが、俺を知らない所に連れてゆく雰囲気がある。スピーカからはひばりの「りんご追分」の Jazz が流れている。田舎のおふくろ、死んだ親父、家族、会社の仲間たち、走馬灯のように俺の人生が想起されるが、それは将来のために、これからのための、鎮魂歌である。これが文化であり風土だ。人には日常から脱却する術が必要だ。そして、いま俺は日常の時空間から抜け出た異次元にいることを実感している。
　上海で詩を 作ったときと小倉では同じ心境になれた。それが文化であり、場の力であり風土なのだと感じる。我々の意識の奥には、いまの意識とズレたいという力が宿っていて、それが絶えず我々の意識に働きかけている。それが顕在化するのはそのズレの意識が場の力と出遭いエネルギーとなるときであるだろう。
　ぼんやりと 中国文化の特色を考えてみる。彼らは文化を次のように定義しているようだ。文化とは、自然に対する人工的なもの総てを指す。日本では、政治、経済、社会、科学、文化というような分類が一般的であることと対比させるとその違いが分かる。易経では、八つのシンボルを使った繋辞法で物事を表現する。
　八卦は、万物の祖形とした物象の写しである。祖形の例には、日月山沢、鳥獣羽毛の文様、草木金石、身体の部分、雷や風などがある。それから派生した記号は森羅万象の諸々の象徴となる。そして、記号から生まれた文字は、様々なキマリを表わす礼となる。この礼が文化そのものである。中国では、文化人と政治人はほぼ同じ意味である。従って、政治の方法とは、文化の恩恵を広くゆきわたらせることである。武力で統治する武治に対して、文治による人々の教化を文化と呼ぶ。
　教育とは正にこの文治を指すと考えられる。
　次に、中文 と日本文の違いを考えてみる。中文は詞中心で、名詞を用いて物事を表現する。一方、日本文は辞中心で、助詞、助動詞類で感情や立場を表現する話し手の言語とされている。この特徴から、日本民族の下記に示す傾向が現れている。
　１）自己主張が強い言語なので相手の身になって相手を優先させて考える
　２）必要以上の謙 遜をする
　３）物事を精緻に仕上げる
　４）求道性が強い：従って、体系よりも奥義を求める
　PFU上海を １992年に設立、1993年に開業したときの苦労話があり、とても興味深かった。それからアジア時代の確立の話になり、Man PowerをMind Powerにしなければならないとの提言があった。次にインドの話になり、タージマハールが窓から見えるホテルに宿泊した話などがあった。最後に教育の話で、昔の大学は研究第一で教育はその次であったが、今の大学は教育第一で研究はその次となっている。学生は研究第一であってほしいとの参加者から多くの意見があった。

（8）討議（6）ソフトウェア技術者のモチベーション（話題提供：岸田／要約：熊谷）
　「ソフトウェア技術者のモチベーション・モデル」というテーマで岸田孝一氏からの話題提供があり、それに基づいて参加者全員で議論した。岸田氏はスライドを使って技術者にとってモチベーションが大切なこと、大切であるが研究対象として挙げられていなかったこと、今年 Euro-SPI で出会った Nathan Baddoo 氏の論文を引用し説明した。その内容の概要を以下に示す。また、関連論文 5 編のコピーを参

加者に配布した。

ソフトウェア工学におけるモチベーションの定性モデルを作成するために、医学分野で使われている Systematic Literature Review の手法を用いたという。医学でこの方法を用いて過去の医療記録を調べ療法を見付けているそうだ。ソフトウェア工学に適用するときに用いた質問事項を以下に示す。

RQ1: What are the characteristics of Software Engineers?
RQ2: What (de)motivates Software Engineers to be more (less) productive?
RQ3: What are the external signs or outcomes of (de)motivated Software Engineers?
RQ4: What aspects of Software Engineering (de)motivate Software Engineers?
RQ5: What models of motivation exist in Software Engineering?

調査の対象を既存の論文とし関係データベースから 2000 編以上を選択し、その中から更に 19 編を選択した。その分析結果をグラフと表を使って説明してくれた。他のエンジニアリングとの比較がキーとなっているが、全体の分析結果からは飛びぬけてソフトウェア工学が異質であるという結果はなかったようにみえる。しかし、SE に特異なモチベーションには、挑戦、変化、有益性、問題解決があるとしている。ここで作成した定性モデルの Validation には次のファクターを用いている。進捗度、情報へのアクセス度、オープン性、自立性と責任感、チームのモラル、不安と危惧。

ソフトウェア工学のエンジニアのモチベーションを論文ベースで分析評価するという奇抜なアイデアに驚き、イギリスの発想の違いを再認識した。エンジニアのモチベーションは教育制度と教育内容、更には現代における仕事と専門性に強く関係しているという議論を全員で行った。特に日本における戦後教育は学歴社会というシステムを育み教育から会社員となり退職するまでを一貫した制度として機能させて来た。しかし、現代の産業資本主義の隆盛が衰えてきてこのシステムの破綻が社会的に露呈し始めている。いまこそ、教育と学問の関係を見直し、教育制度が「専門バカ」と「世間知らの勉強好き人間」を生み出すのではなく、専門世界、学界業界、世間という三世界で生きること、かつ技術革新の担い手になれるやり方を定着させること、国政ではない江戸時代の壊徳堂のような私塾の有用性などを議論した。また、中国のソフトウェアエンジニアのモチベーションについても議論した。いまでも、海外に行くこと、お金を稼ぐことがモチベーションのトップであるという。日中に違いに興味が湧く。続きは次回ワークショップに期待したい。（おわり）

6.　参加者感想

■岸田氏

ほぼ1年ぶりの上海でしたが，やはりずいぶん変っていましたね．市場で売っている腕時計の作りが少し上等になって，その分値段が高くなった（以前は20元くらいだったのが，いまは2倍）．

地下鉄「人民公園」駅の変貌は！　まるでできの悪いSF映画．

東台路の骨董市の向かいにあった草木鳥獣市場が改装のため取り壊されていたのは悲しかった．あそこでこおろぎの餌を入れるままごとのお皿みたいな小さな陶器を買いたかったのに．

今回は時間がなくて画廊やアート・ヴィレッジを観に行く暇がなかったのは残念．激辛の湖南料理や四川料理の店にもいけなかった．

次回はやはり2～3日の余裕をもった旅程を立てなければ！

■熊谷氏

久し振りに上海で4日間を過ごした。中福大酒店という四星のホテルに滞在した。南京東路から近く最寄りの地下鉄駅が人民広場である。日本からの往路は羽田から虹橋で、11 月 6 日の ANA1281 便に乗った。午後 1 時に虹橋空港に降り立った途端に例の上海の匂いがした。懐かしい様々な思いが蘇る。タクシーを拾おうと乗り場に移動する。なんとかつてのタクシー乗場にはディズニーランドの入場を制御するためのものと同じ鉄枠が設置されていた。タクシー待ちの客がほとんどいなくて直ぐにタクシーに乗れるのに、100 メートル以上も荷物を持って歩かなければならないことになっていた。中国にはサービスという概念がないことを改めて知る。早速、タクシーに乗り運ちゃんに「中福大酒店」と書いたメモを見せる。若いアンちゃんだった。車は他車を抜き去り滑るように走った。車窓から見える周囲の景色は十六年前とは打って変っている。高層ビルの連続である。まるで、香港にいるような錯覚に陥る。俺が上海にいた頃は高速道路や環線がなかった。だから街の景観がまるで違うのだ。ややして、見覚えのあるビル群に出会い、ようやくホッとする。外は小雨で曇っていて蒸し暑い。杉田さんが東京と同じ気候であるという情報を流してくれていたのでそれに従ってウールシャツとジャケットを着てきたのでとても暑く感じる。JC Mandarin、新錦江飯店、花園飯店を見、これこそ上海だと来し方を楽しむ。今回のワークショップは PFU 上海を興したときの話をするのが目的である。高架道路を降り左折しその先を右折しホテルに着く。英語ではこのホテル名が「Shanghai Charm Hotel」である。どういう意訳だとこうなるのか不思議だ。ホテルの雰囲気は古い中国を思わせ中々よい。気に入った。一日 420 元の宿泊料金である。とても安い。試しに JC Mandarin の宿泊料金を調べたら二倍以上であった。

機窓を見やると眼下に灰色の雲海が見え、右手後方に雲平線に太陽が沈もうとしている。雲平線の上には雲ひとつない宇宙が続いている。沈み行く太陽の周囲に白い雲が少し付いている。何か神秘的である。雲平線は夕陽のために黄色に色付き始めている。いまは 11 月 9 日午後 4 時 55 分（日本時間）。ANA1282 は 4 割弱の客の入りである。俺の席は 34G で窓側。前の席はリクライニング装置が壊れていて、客はどこかに移動した。後ろの席の若い中国の美女二人連れは、Fasten seat-belt の点灯が消えたら直ちに真中の席に移動した。つまり、俺は 6 人の席の中に独りで座っている感じである。飛行機は雲の中に入り翼の先端のランプが美しく輝いている。機長からのアナウンスがあり、東京は晴れで気温は 12 度 C らしい。寒そうだ。機窓の外は光を失い始め、空と雲の区別がなくなった。ピンと張った翼と黄白色に輝いている灯がとても美しい。ピンとした翼で空間を切っているような感覚を楽しむ。

今回の SIGEDU と SEA 上海支部の合同ワークショップではいろいろなことを確かめることができた。第一は SEA 上海の人間のつながりと暖かさと心地よさ。第二は上海の良さと力強さ。第三は俺が尽力して作った PFU 上海の活躍と社会的評価。第四は居徳華先生の中国における社会的位置とその活躍である。今回初めていろいろ話をした水野さん、東さんも面白い好漢であった。彼らのような若い人々がイン

ターナショナルな場で活躍しているのは心強いし心が躍る。これからも何かあれば協力し応援したい。所詮人は独りであるが、ネットワークと連携が必要であることを上海の地で改めて感じた。彼らの表情と生き方には未来と希望が宿っているようにみえた。一方、日本からきた人々は表情と話す内容に元気がなくまるで減衰曲線をみているような気になった。それは、現代の中国と日本の加速度の違いなのだろうとも感じた。もはや、勝負ありかもしれない。

俺の発表が参加者の心に響いたのかどうかは反省する余地がある。今回のワークショップのために提出した資料が、「ソフトウェアエンジニアの品格」、「言葉と仕事の関係」、「小倉にて」、「技術革新と教育エンジニアが生まれる 風土－中国、日本、インド、アジアー」、「上海での起業方法」「文化、文明、技術－教育の基盤と目的－」と多岐に渡った。起承転結の筋を示すことができなかったかもしれない。アジアという視点から日本と中国を見直しその関係を皆さんと議論できるように持って行かなければと述懐している。そういう意味で、ハイロン社を訪問し、若手の中国エンジニアと会話できたことは意味がありとてもよかった。牧野さんが彼らと話す態度から様々なことが推し量られた。牧野さんには中国の人々に対する愛と真心があるのがよく分かった。その源泉が何であるかをその夜に知ることになったがそれはそれである種の感動を与えてくれた。

藤野真子さんの越劇と昆劇の話は興味が湧き面白かった。上海人はどのような状況に置かれても余裕があるのだと思った。広い意味で、上海人はやはり文化人なのだろう。生活が苦しく、政治的にも閉塞状態にあっても彼らは連綿と劇や芝居で毎日の生活に潤いを与えかつその芸と芸人を次から次への生み出して行ったのだと理解できた。特に、最初は越劇の役者が男だけだったのが、人気が落ちたら若い女を役者に起用したことを知って流石だなあと感心した。状況に応じて、伝統やしきたりを簡単に変えて新しいやり方を実践する上海人の進取の気取りと逞しさを感じた。いまでも、越劇も昆劇も上演されているとのとの話なので次回上海訪問時は観劇したいと思った。

特筆に価するのは、臼杵さんの奥さんである。彼女の言動は新鮮で従来にない日本女性の型を感じた。生き方や夫婦の絆という観点から天晴れという感想を持った。働いた給料のほとんどを日本酒の愛好に費やすという生活の片鱗を聞いただけでその全体を窺い知ることができる。趣味が野球、日本酒、飲み歩き、海外生活、など聞けばこれはまるで一昔まえの男性社会である。彼女は豪傑で傑作だとある種の感動を味わった。SEA では名物で伝説に近くなった岸田夫人と臼杵夫人の会話は見事な調和と迫力があった。お二人の共通項は、旦那方に口を出せる暇が与えないことである。その芸も見応えがあり面白い。今度横浜に招待して日本酒を堪能して貰い、その代わりにその歯切れのよい台詞と生き方を楽しみたいと思っている。

11 月 8 日の昼食は杏花楼で取った。鮑の姿煮、細面の焼きそばが旨かった。その後東台路の古物市場に岸田さんと杉田さんと一緒に出掛けた。売買のときの駆け引きを楽しみながら香炉を三点買った。それから新天地まで歩いた。すっかり様子が変ってしまった上海の中心街を歩く。買い求めた甘栗と冬棗をかじりながらブラブラした。新天地のハイカラでカラフルなバーでジョニーウウオーカーの黒ラベルを飲んだ。街全体が有機的なシステムから無機的なシステムに変化しているような感じを持った。例えて言うならば、まるで人工都市の中にいる気分だ。新し物好きの上海人の趣向の賜物に違いない。

居先生の招待で准海路にある「留園」で夕食会。先生の説明によれば、ここは蘇州料理がベースの店で、先生は蘇州出身だという。当店の名物料理を戴く。上海醤方（豚の三枚肉でトンポウロ風に青菜と煮込んだもので脂身が旨い）、酔蟹（絶品、いままで食べた酔蟹中で一番、これと酒があれば他は不要と思うほど旨い）、桂魚濃湯（桂魚を鶏スープで煮込んだもので美味い）、棗泥糕（棗が入った餅で真中に餡が入っているデザート、蘇州名物）。酒は上海老酒「石門」を飲んだ。全部の料理が形態と見た目が上

品で美味しかった。この店は陝西南路 141 号にある。居先生から教えて貰った中国各地の特徴が面白かったので記す。西安人は故郷を離れるのが嫌で酒飲で賢い、成都人は時間を守らず仕事とレジャーの区別がない、武漢人は個人主義が徹底していて集団活動が苦手、北京人は権力と政府に依存しすぎ、上海人は賢明だが極度に仕事のし過ぎの傾向がある。無論人の性格は個人に依存するのだが、人が育った環境からその人が受ける影響は無限大である。中国の知人たちを想起しながら居先生の話を聞いてなるほどと頷いていたことを思い出す。

飛行機の外は真っ暗になり、翼の先の灯も見えない。機が激しく揺れだしノートを取ることもできなくなった。それでも俺はミミズ文字で書き続ける。書くこと自体に目的はないのだが、なぜか俺は書き続ける。過去のためか、明日のためか、俺のためか、いま俺は感じていることを書き続けている。やはり、徴が欲しいのだろう。

今回のワークショップを計画し実行して下さった杉田さん、牧野さん、魯さんに心から感謝したい。よい機会を作ってくれて本当にありがとうございました。また適切な時期に開催してくれることを期待しています。謝謝！再見！上海！

（おわり）

■杉田氏

人生はカリキュラム通りには進行しない。それを妨げるのは、人との出会いや、刺激を受ける出来事など、偶然の産物ではないか。ワークショップの企画も、私は上海にロングステイしているのと、SIGEDU ゲイシャ管轄の牧野さんが上海赴任が決まったと同時に走り出した。

もともと SEA は中国との交流の積み重ねがあり、基調講演を検討するだけで上海近辺には多くの候補者があることを岸田さんから聞いていたのでその中から ASTI の Ju 先生に依頼することにした。また招待講演にはそれも偶然に関西学院の藤野先生に、古典芸能という文化的な側面でお話を聞くことになった。

企画運営する上でベースになったのは上海の魅力をどう生かすかということであった。街を歩くだけで元気になるその雰囲気を味ったり、評判のよいレストランで秋のグルメを楽しんでいただいた。確かにシーズンの上海蟹は大変おいしかったが、上海料理は薄味で、甘めの味付けであり、少し北方系のレストランも含めた方が良かったかなと反省している。

運営に関して Google-Group を使ったが、これはこのようなメンバー限定で運営する場合に威力を発揮した。参加者の募集やいろいろな案内、連絡事項、討議することなどメーリングリスト機能を使ったり、共有情報を Web で管理できる。今後のいろんなイベント運営に活用したいと思っている。

蟹味噌のようにがっちり詰まった上海教育ワークショップに参加して、参加された女性陣を含めていろいろな刺激を受けたが、まだ私の体の中では消化しきれていないようだ。しかし何かしら偶然も一杯あり、それらを重なり合った状態でお茶でも飲みながら将来を思い描きたい。

■米島氏

今回は sigedu ワークショップとしては、１９９０年第４回のソウル開催以来、二度目の海外での開催となりました。実行委員長、ローカルアレンジメントを担当してもらった牧野さん、杉田さんがたまたま上海駐在中であり、今がチャンスと当初から上海開催をベースに検討が進められました。

距離的にも費用的にも国内開催とさほど変わらないとはいえ、さすがに sigedu 常連メンバーの参加が

少なかったのは少々さびしくはありましたが、SEA 本体から、常連幹事の熊谷さん、事務局長の岸田さんが参加され、その寂しさを補って余りあるほどの成果を見ることができ、sigedu メンバーとして喜びに耐えません。

基調講演の Ju 先生の講演で、壮大な中国ソフトウェア技術者育成計画を拝聴し、その構想のスケールの大きさと、本質を捉えたアプローチの姿勢に感嘆しました。リソースのボリュームの小さな日本のことを思うとよくよく考えないといけないと教育工学に携わる一員として身の引き締まる思いでした。

ワークショップの各セッションの内容は、要約に任せることにして、各セッションとも、地元 SEA 上海からのオープン参加の方々も交え、活発で忌憚のない意見交換ができ、参加者全員有意義な成果を持ち帰ることが出来たと確信する次第です。テーマとは別に、中国（特に上海）経験の深い、熊谷さんや岸田さんから、中国事情や歴史的な見解などもお聞きすることが出来参考になりました。また、地元から参加の藤野先生を始め、松野さん、東さん、鈴木さん、そしてほとんど牧野さんのお誕生会だけのために寄ったような小川さんとも交流することができ、今後のお付き合いのきっかけも作ることが出来ました。

最後に事務局としてご尽力くださった牧野さん、杉田さん、魯さんに対し心から感謝します。有難うございました。大辛苦羅～！（あってるかな？）

■臼杵氏

私自身、上海は初めてで、知り合いからは空港からタクシーではなく電車での移動はチャレンジャーだと冷やかされていました。浦東空港に着いてリニアモーターカーに乗ったところまではよかったのですが地下鉄2号線に乗り換える際、切符の買い方に少し戸惑いました。最初に並んだ券売機ではコインしか使用できず、再度１００元札が使用できる券売機に並び直しました。いざ、買う場面で画面の操作をネットで得た情報をもとに少し戸惑ったが後ろから文句を言われることなく2枚購入できました。出発前にネットで下調べしたのが役立ちました。このような情報を写真付きで公開している方に感謝です。しかし、地下鉄では乗った時間が帰宅ラッシュであったため、スーツケースを持って移動は予想以上に大変で、目的の人民広場で降りれるか冷や汗ものでした。なんとか駅で降りれたのですが、外に出たら、雨が降ってきておまけにホテルまでの道が水たまりありのガタガタ道でスーツケースを引きながらの歩きも辛かったです。しかも、予想はしていましたが、車優先の横断歩道で引かれそうになったりで大変でした。ホテルのネオンが見えてきたときは流石にホットしました。ロビーでの杉田さんたちの歓迎を受け安心しました。杉田さんたちからはもう上海なんてコリゴリと思って移動してきたのではないかと言われ、この時は少しそう思いました。しかし、この思いは晩さん会、連日の豪華な食事、杉田さん、岸田さんの奥様方の観光案内、魯さんによる上海観光案内など皆様方の温かいおもてなしにより払拭し、また近いうちに上海に来たいという思いで帰国いたしました。いろいろとご迷惑をおかけいたしましたが楽しい上海ワークショップでした。本当にありがとうございました。以上です。

■松野氏

本来であれば全ての討議及び公演に参加する予定でしたが、 突発的な顧客対応に追われ、参加出来なかった事を非常に残念に思っております。最終日の熊谷様・岸田様のお話をお聞きし、更に後悔後悔です。次回、WSが開催される場合は、是非参加をしたいと思っております。

私も徐々にではありますが、活動の場を日本へシフトしていきたいと計画をしております。その時は、是非日本でも積極的に参加を出来ればと思います。

最後に、この様なWSに出席する機会を与えて頂き本当に感謝をしております。

■牧野

第 22 回教育ワークショップを終えました。22 回の歴史の中で 2 度目の海外での開催でした。一度目は第 4 回韓国ソウル市、私はまだ SIGEDU のメンバではありませんでした。2 度目の海外での開催が出来た事を喜ぶ反面、常連メンバがほとんど参画できなかったことに申し訳なく思っています。しかし、上海は

中国の中でも目覚しい経済発展を遂げており、ソフトウェアのオフショア開発の中心地であることから、上海での開催は意味を持っていると思っています。今回のワークショップは極力、異文化、現場に触れること、ワールドワイドを意識したプログラムとしました。

上海での開催は 2008 年 3 月の SIGEDU 月例会において決定しています。3 月月例会は年間活動計画を決定する場です。上海在住であり SEA 幹事でもある杉田氏が月例会に参加され、上海誘致をしてくださったのです。実際にはその少し前の SEA 幹事会において、上海開催の話題が出ており、事実上決まっていたようなものでした。杉田氏と牧野が上海に駐在しており、タイミングとしても 2008 年開催が一番最適な時期でもあったのも事実です。

6 月には、11 月に上海でワークショップを開催することへのアピールを兼ねて事前アンケートを実施しました。事前アンケートから、中国だけでなくアジアにおけるソフトウェア開発、技術者育成について議論したいとの意見や、オフショア技術者との交流により現場の実態を知りたいとの意見を収集しました。オフタイムとしては旬である上海蟹を食したいとの要望をがっちりと掴みました。

真夏の暑い時期に会場候補である科学会堂を視察しましたが、併設の宿泊施設は外国人に開放していないとのことで断念しています。でも、この会場は別途 9 月に開催した"SEA 上海ソフトウェアフォーラム 2008"で活用することとなり、無駄な視察にはなりませんでした。何とか 8 月中には決定したいとの思いで、杉田氏とともに 8 月下旬に中福大酒店を視察に行く途中に、牧野に帰任命令の電話が日本からかかってきたのは余りにも皮肉であり、誤算でした。しかし、9 月末に帰国することになった私に、ワークショップ実行委員長として最後まで任務を遂行させてくれた会社にはとても感謝しています。

さて、結果的にはフルエントリーは 7 名でした。BOARD から熊谷氏、岸田氏、SIGEDU から米島氏、臼杵氏、SEA 上海から松野氏、杉田氏、牧野の参加でした。一部はオープン参加とすることにより、SEA 上海から鈴木さん、東さんの 2 名の参画がありました。また、お忙しい日程の合間を縫って、SEA-SPIN メンバである小川さんが夜間のコミュニケーションの場に駆けつけてくださったのが嬉しかったです。

私は、オープニングで、次のように発言し、クロージングでそれを振り返えりました。

せっかくの中国（上海）開催です。
日本のこと（日常業務）を忘れ、
極力広い視野で、
大いに議論を盛り上げ、
秋の味覚を堪能し、
全員が元気で帰国すること。

- 日本のこと（日常業務）を忘れ、
  日本シリーズの結果以外は、ほとんど会話にでていなかったと思います。
- 極力広い視野で、大いに議論を盛り上げ、
  Ju 先生の壮大な計画に始まり、ハイロン社技術者との交流、藤野先生による劇文化、熊谷さん岸田さんのセッション等々異文化に触れながら、ワールドワイドな意見交換が出来たかと思います。
- 秋の味覚を堪能し、
  杉田さん魯さんのお陰で、素敵なレストランで、美味しい中華の世界を堪能する事ができました。
- 全員が元気で帰国すること。
  約 1 名、後半体調が芳しくなかったのが残念です。日頃のお疲れが出たのでしょう。

ということで、私は目的をほぼ達成できたと思っております。一つひとつのセッションについては、各ご担当がまとめてくださっているのでコメントを省略させていただきますが、今回の特筆はローカルアレンジメントにもありました。杉田氏、事務局魯さんの選りすぐりのレストランはとても素晴らしかったです。各店趣きが異なり、中華料理の奥の深さを感じさせてくれます。上海蟹もまさに旬！あの味噌の濃さは格別ですね。ハイロンへの往復はタクシーと地下鉄を利用し、上海を肌で感じる場の一つとなりました。個人的には、ワークショップ期間中に私は誕生日を迎えましたが、参加者全員にケーキで祝っていただけたことは一生忘れません。中国式の誕生日会は記憶に残る誕生日会となりました。謝謝。

ワークショップに参画してくださった各位にお礼を申し上げます。また、素晴らしいローカルアレンジメントを実現してくださった杉田氏、魯さん、本当にお疲れ様でした。残念ながら参画できなかった SIGEDU のメンバにも色々とご支援をいただけたことに感謝の意を表明し、次年度の実行委員長にバトンを渡したいと思います。

■魯玉芳(事務局) （福善(上海)信息技術有限公司）
今年の WS に参加させていただき、本当に勉強になりました。

私は大学を卒業してから、会社人として今年は 3 年目です。経験はまだまだ少ないですが、さまざまな人との出会いから分かったのは、教育が会社にとっても、国にとっても、最も重要ということです。しかし、今回の WS に皆様が語られたように科学的に分析することは考えも及びませんでした。皆様の発表を聞きまして、私は心の中では、「なるほど」、「そうです」としか言えませんでした。特に米島さんがスキル階層図や学習モジュールを紹介されたのには感銘を受けました。

そして、ハイロン社へ行ったのは本当によかったと思います。ハイロンの社長とは会ったことがありませんが、そんなにすごい社長とは思わなかったのです。「人は見た目によらない」、その通りです。中国では、社内教育をしっかりする会社はまだまだ少ないです。皆様がご存知と思いますが、中国は日本より転勤率が高いのです。せっかく会社で教育をしても 30 歳までの若者はたいてい一年後、ソフトウェア業界では何ヶ月後で辞めるケースが多いのです。ですから、ほとんどの社長は目の前の利益だけを重んじ、社内教育はしません。ハイロンの包社長が会社方針として社員教育をしっかりするのは、ハイロン社の人材貯蓄ばかりではなく社会へ貢献していると思います。

もう一つ、中国伝統演劇に興味を持っている日本の方々がいることは、心からありがたく思います。私は紹興出身ですが、そこで有名なのは紹興酒だけではなくて、越劇もあります。しかし、越劇を一緒に見に行ってくれる同じ紹興の友達は 2、3 しかいません。越劇は方言の名残があり、同じ紹興出身の友達も見ないのに、中国全体で見る人はもちろん極めて少ないでしょう。紹興酒も同じです。日本人には紹興酒が好きな方が多いようですが、中国人で紹興酒を飲む人は、今や少数派です。食事会や結婚式へ行くと、みんなワインです。私から紹興酒を頼むと、「えっ、紹興酒」なんて馬鹿にされることが聞こえます。今年はちょうど改革開放してから 30 周年です。この 30 年には外国からよいものが入ってきたのは事実ですが、中国には昔から伝わってきたよいものがあります。伝統を全部捨ててしまうのはだめではありませんか。私はいつもそれを見ると悲しくてしようがありません。
この度牧野さんの言葉に甘えて、感想文を書くチャンスをくださいまして、心から感謝しています。

以上

7.　WSレビュー

基調講演：Prof.JuDehua

討議（1）話題提供：臼杵氏

昼食：利和苑（中福ホテル2F レストラン）

ホテルに設置された会議案内　上海教育？

上海ハイロン社訪問：会社＆教育説明

上海ハイロン社訪問：技術者との交流会

討議(3)話題提供:米島氏

招待講演:藤野先生

招待講演:藤野先生を囲んで

11 月 7 日夕食:老正興　上海蟹

11 月 7 日夕食:老正興　上海蟹と格闘

南京東町を歩く参加者(杉田、熊谷、岸田、臼杵)